

# 昔話法廷

## 論点表

### 最終話「桃太郎」裁判

#### 起訴状朗読・罪状認否

- ・起訴状によると、桃太郎は、犬猿雉をお供に、『鬼退治』と称して鬼ヶ島を襲撃。持っていた刀で鬼の一人を斬り殺し、30人以上に重傷を負わせた。そして、鬼たちが持っていた財産を奪って村に戻った。
- ・これは、刑法第240条の強盗殺人罪にあたる。検察官は、あまりにも凶悪な犯行として、『死刑』を求刑。
- ・桃太郎は、罪を認める。
- ・弁護人は、「この犯行は、鬼に襲われる人々を守るためにやむを得ずに行ったものであり、その動機には十分情状酌量の余地がある」として、極刑回避を訴える。
- ・桃太郎を死刑にするか、それとも死刑にはしないか。それが、この裁判の争点。

#### 検察側証人：殺された鬼ノ助の妻

##### 検察側

- ・事件の日、夜10時ごろに急を知らせるドラの音が聞こえてきた。夫である鬼ノ助は寄合が合って出かけていた。心配になった妻は、子どもを背負って夫のいる場所に向かった。そこで目にしたのは、うめき声をあげながら、そこら中に倒れている鬼たちの姿だった。
- ・妻は、鬼ノ助を見つけて抱きかかえた。しかし、鬼ノ助は、すでに虫の息だった。「夫は、『子どもを頼む、そして鬼芋をよろしくな』と言い残して息を引き取りました…」。
- ・鬼ヶ島は、岩だらけのやせた土地で作物がほとんどとれない。だから、鬼ノ助はみんなが飢えないようにしたいという思いで、やせた土地でもとれる作物を必死に研究していた。そして何度も失敗を重ねやっと栽培に成功したのが、鬼芋だった。
- ・「これでやっと安心して暮らしていけると、喜んでいたのに…」妻は涙を流しながら無念を語る。
- ・鬼たちは、人間からひどい差別を受けてきた。見た目が違う、肌の色が違うと言って、鬼ヶ島に隔離された。
- ・「桃太郎には、死んで詫びてほしい！」妻は、極刑を望むと、裁判員に訴える。

##### 弁護側

- ・鬼が、人間に対して行う悪事が後を絶たない。裁判の前週の火曜日には、バイクに乗った赤鬼がおばあさんからカバンをひったくり、その際おばあさんに大ケガを負わせた。金曜日には、鬼の一団が村を襲い、食料や家畜を根こそぎ奪っている。
- ・鬼ノ助の妻は、「生きるために仕方なくやっていること、それぐらい鬼ヶ島での生活は厳しい、元はと言えば鬼を差別して島に追いやった人間が悪い」と主張する。それに対して、弁護人は、「あなたたちは、『差別されている弱者だから悪事をはたらくのも仕方がない』と言うが、そのせいで、親を奪われてしまう子どもたちや、生活を壊されてしまう人間たちがいるということを想像したことがあるか?」と問う。
- ・裁判員の杏子は考えていた。「鬼からみた“悪”は人間から見ると“正義”…。立場が変わると、見える景色がガラリと変わってしまう」ということを。

#### 弁護側証人：桃太郎のおばあさん

##### 弁護側

- ・おばあさんは、桃太郎について語っていく。「川で洗濯をしていたら、『ドンブラコ、ドンブラコ』と大きな桃が流れてきた。拾って割ってみたら、中から赤んぼうが飛び出してきた。その子に『桃太郎』と名付け、大事に育ててきた。桃太郎は、素直で明るくて何より力持ち。『僕がおばあさんの分も働くよ』なんて言ってくれる、自慢の息子だった」。
- ・今回の事件の発端になったのは、ネットに流れた鬼からの『襲撃予告』。追われた土地を取り戻すため、人間に無差別攻撃を加えるというもの。
- ・襲撃予告を受け、恐怖のどん底に突き落とされた村人たち。そのおびえる様子を見かねて、桃太郎は、鬼退治に行くことを決めた。

- ・危険な鬼たちがいる鬼ヶ島に行く桃太郎を、おばあさんは、おじいさんと必死に止めた。しかし、最終的には、きび団子を持たせて、桃太郎を送り出した。おばあさんは、その理由を、「桃太郎が『正しい』と思ったから」だと語る。「桃太郎は、鬼におびえるこの国の人たちのために、命を賭して戦おうとした。そんな子がどうして裁かれなければならないのか!」
- ・おばあさんの訴えに、傍聴席に集まっていた村人たちも、「そのとおりだ!」「桃太郎は悪くない!」「桃太郎はおれたちを守ってくれたんだ!」「命の恩人なんだ!」と声を上げる。ます。
- ・桃太郎は、鬼が起こそうとした“テロ”を未然に防いだ“英雄”なのか?

## 検察側

- ・おばあさんは、「襲撃予告を出したのが鬼ではなく『人間』だったとしたら、桃太郎はその人たちを退治せず、他の方法を考えるはず」と語る。鬼には暴力をふるってもいいが、人間なら襲わない。「鬼は人間を喰うので退治しなければならない」というのが理由。鬼が人間を食べるといのは事実ではないが、人間たちの間では、そう信じられてきた。
- ・おばあさんは、傍聴席にいる鬼ノ助の妻に向かって、「気味が悪い…」とこぼす。「角が生えてて、変な肌の色してて…。そんなやつらを人間と同じだなんて思えるわけがない!こいつらが鬼ヶ島でおとなしく暮らしていたら、桃太郎もこんなことせずにすんだのに…」と言い放つ。

## 検察側証人：桃太郎といっしょに鬼ヶ島に押し入った犬

### 検察側

- ・犬猿雉は、桃太郎に会った際、いい匂いがしたので「そのきび団子をよこせ」と声をかけたところ、「鬼ヶ島についてくるならやる」と言われた。「団子一つで鬼退治なんて割に合わない」と断ったら刀をちらつかされて脅され、しぶしぶ鬼ヶ島についていくことを決めた。
- ・「桃太郎に犬猿雉、わずか4人で、どうして大勢の鬼たちを退治することができたのか?」検察官の疑問に、犬は「それは、鬼たちが“親切”だったから」と答える。
- ・犬たちが鬼ヶ島に着いた時、酒盛りをやっていた鬼たち。最初は突然人間に戸惑っていたが、そのうち鬼から話しかけてきてくれた。「もしかして船が流された?」「お腹空いてない?」と。
- ・鬼たちはみんなニコニコして武器も持っていなかったため、油断させて襲い掛かってくるような雰囲気はまるでなかったという。つまり、桃太郎は、襲われる危険性がないとわかっていながら、鬼たちに斬りかかった。
- ・金棒出して抵抗しようとした鬼たちもいたが、リーダーばい鬼が捨てさせた。「もう人間は襲わないって決めただろ!それじゃ、いつまで経っても同じことの繰り返しだ!」と。その鬼のリーダーとは、鬼芋の栽培に尽力し、桃太郎に斬り殺された鬼ノ助だった。
- ・桃太郎は、逃げ回る鬼たちを追いかけバツバツと斬り捨てていった。犬は、「桃太郎のほうが、よっぽど“鬼”だった」と語る。

### 弁護側

- ・弁護人は疑問を呈する。「差別されて恨みを抱く鬼が、突然現れた人間に親切にするものか?しかも、目の前で仲間が斬られたのに、『武器を捨てる!戦うな!』なんて言うか?」。
- ・さらに、犬猿雉が不起訴になっている事実にも言及する。犬猿雉は、桃太郎といっしょに、鬼たちに噛みつきたりひっかいたり、くちばしでつついたりして、ひどい暴行を加えていた。しかも、島から戻った時に、奪った財産の一部を分け前としてもらっていた。それなのに、刑務所にも入らない。
- ・「もしかして、桃太郎を悪者にする証言をすればいいことがあるって、誰かさんに言われたんじゃないか?」弁護人は、検察官が犬と取引をした可能性があることを示唆する。それに対し、検察官は、「不当な取引など、一切していない!」と異議を申し立てる。
- ・桃太郎は、人間と戦う意思のなかった親切な鬼たちに、一方的に斬りかかったと、犬は言っている。しかし、もし、そうだとすると、鬼から「襲撃予告」が届いた事実と矛盾する。いったい何が本当なのか…?

## 被告人質問：桃太郎

### 弁護側

- ・桃太郎は、鬼におびえるおじいさんやおばあさん、村の人たち、そしてこの国に暮らすみんなのために鬼退治をした。
- ・桃太郎は、鬼退治をすれば、罰せられることもわかっていた。それでも、鬼がこれに懲りて人間を襲わなくなるのであれば、やる価値はあると思い、鬼ヶ島に向かった。
- ・「なぜ、そこまで思い切ることが出来たのか?」弁護人の疑問に、桃太郎は、「僕が本当は、『死んでいたはずの子ども』だったから」だと答える。「おばあさんに川で拾われていなければ、今生きてはいない。桃から生まれた子どもを気味悪がらず、おばあさんやおじいさん、村の人は僕を大事に育ててくれた」と語る。
- ・桃太郎は、鬼退治に行くことがどれだけ危険であろうと迷いはなかった。命の使いどころはここだと思った。
- ・『桃太郎の罪を軽くしてほしい』という嘆願書が、全国から数多く寄せられている。桃太郎が「みんなのため」に鬼退治をしたという民意の表れ。

## 検察側

- ・検察官が質問する。「桃から生まれたあなたは何者ですか?」。これは、事件の半年前、桃太郎のSNSに寄せられた質問。
- ・その時、桃太郎は、「人間だ」と答えたが、その答えは、SNSで格好の標的になった。信じられないようなデマや中傷が、桃太郎に浴びせられた。「桃から生まれたヤツが、なんで人間なの?」「得体の知れない下等生物」「そういえば、アホみたいに力が強い」「ぶっちゃけこいつ…、鬼なんじゃね?」「ハチマキ取ったら、ツノ生えてたww」「キモイ」「人間のフリすんな」「鬼ヶ島に帰れ」「死んでくれ」……。
- ・そして、事はネットの中だけではおさまらなかった。桃太郎は、村でも、露骨に避けられ無視されるようになった。桃太郎が触れたものは目の前で捨てられ、仕事もクビになった。おじいさん、おばあさんまで白い目で見られるようになった。それまで仲の良かった村人たちは、SNSの書き込みを真に受けて態度を一変させた。
- ・そんなタイミングで、鬼から「襲撃予告」が届いた。実は、襲撃予告は、桃太郎が流したものだだった。
- ・「居場所が欲しかったのか?」と問う検察官に、桃太郎は、「ただ笑いたかったから」と答える。
- ・普段は鬼を見下しているくせに、襲撃予告を受けたら、案の定ビビりまくる村人たち。桃太郎のことを「鬼だ!」「出ていけ!」って言ってたのに、桃太郎が鬼を退治したら、手のひらを返して『村の誇りだ!』『英雄だ!』と言い出す。
- ・ネットでも、『死ね』という桃太郎への中傷が、桃太郎の死刑回避を求める声に様変わりしていた。
- ・桃太郎は、涙を流しながら思いを述べる。「あいつは鬼だ、敵だ、いやいや人間だ、しかも英雄だ!って、いちいちいちいち大騒ぎする…。俺は、ずっと俺でしかないのに…」。
- ・人間からいわれない差別を受けた桃太郎は、その人間を手の平に乗っけて、右往左往する様をあざ笑ってやりたかった。そして、差別というものが、いかに根柢がなく愚かなものか世に突き付けてやりたかった。
- ・そんな桃太郎に、検察官は、「それが鬼を襲っていい理由になりますか?つまりあなたは、自分の目的を達成するために、全く無関係な鬼たちを、何のためらいもなく犠牲にした!そのことについて、どう思いますか?」。桃太郎は、答えることが出来ない。
- ・検察官は、静かに問いかける。「あなたもまた、あなたがあざ笑いたかった愚かな人間の一人であったと思いませんか?。「ウケますね、それ……」桃太郎の答えに、検察官はこう返した。「どんな笑いであれ、笑えるだけいいですね。鬼ノ助さんは、もう二度と笑えないのですから」。
- ・法廷内に、桃太郎のおばあさんの泣き叫ぶ声が聞こえる。「ごめんよ、桃太郎。つらい思いをさせて……。何一つ守ってやれず……」。それを聞いて桃太郎は、ただ涙を流すばかり。
- ・裁判員の杏子は考えていた。「桃太郎のしたことは決して許されることじゃない。でも、これって、桃太郎だけが悪いと、バツサリ斬り捨てていい話なのかな……」と。

## 最終弁論

### 検察側

- ・桃太郎は、自分を追いつめた人間をあざ笑ってやりたいという、身勝手極まりない理由で凶悪な犯行に及んだ。
- ・襲撃予告をでっち上げるなど、その計画性は明らか。
- ・一方で、命を奪われた鬼ノ助は、人間と鬼との争いをなくそうと懸命に努力していた。桃太郎はその努力を無にしただけでなく、更なる憎しみを植えつけた。
- ・死をもって償う他ない。

### 弁護側

- ・桃太郎は、その生まれからいわれなき差別を受け、誹謗中傷の的になってきた。そして、その耐えがたい苦痛を、たった一人抱え込んできた。
- ・だからといって、それが罪を犯していい理由にはならない。差別をされているからといって、悪事をはたらいいていいことにはならない。桃太郎は一生かけて償うべき。
- ・その上で考えるべきは、桃太郎を死刑にすることが、本当の意味での解決になるのかということ。
- ・今回の事件を生み出したのは、差別を許すこの社会、私たち一人一人の心にはびこる悪意。そういった意味で、桃太郎も『被害者の一人』だった。
- ・今後このような犯罪を生み出さない、差別のない社会を構築するためにも、やはり桃太郎は死刑にしてはいけない。